

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」③7

欲生心は如来の回向心

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第91回と第92回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、十八願成就文について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第90回から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部良一）

■大悲心は深層意識にはたらいている

第十八願成就文の「願生彼国 即得往生」（『真宗聖典』44頁、東本願寺出版、以下『聖典』）、願生すれば即ち往生を得るということは、欲生心よくしようが成就することだと親鸞聖人はおっしゃる。「欲生」というのは如来が衆生にわが国に生まれんとおもえと、勅命、命令してくださっているのだと。その呼びかけの場所は、実は本願である。本願の場所に來たれと。願生せよというのは、その願いに触れればたすかるのだ。だから曾我量深先生は、「信に死し願に生きよ」とおっしゃった。願生というのは願に生きることだと。

『教行信証』では「欲生はすなわちこれ回向心なり。これすなわち大悲心なるがゆえに、疑蓋ぎがい雜まじわることなし」（『聖典』233頁）と。生まれんとおもえという勅命は、如来が大悲の心をもって衆生めぐに回らし向けようとする心なのだ。その勅命は、如来自身が衆生に全部投げかけてくれる、如来の回向であると。

このことが私は、読んでも読んでも、どのような意味かわかりませんでした。けれども、結局わ

かるという理性の対象にはならないのです。われわれの煩惱の心では見えない。衆生の苦悩の闇をみそなわして大悲がはたらく場所は、私たちの存在の根の部分であって、上のほうで浮ついて生きている心の部分からは絶対に見えない。そういうところにはたつき続けている。このごろ、私はこれを「深層意識」という言葉で言ってみてはどうかと思っています。深層意識に大悲心がはたらいている。これは、われわれからは見えない。見えないけれども、私たちに何か勅命としてきていますから、それが何か突き動かして、教えを聞かせたり、本を読ませたり、仏法は何を言おうとしているかと気にかかってくる。そのようなものは、自分で気にかかるというより如来の勅命が動かしてくる。

欲生心、「わが国に生まれんとおもえ」という呼びかけは、如来の回向心なのだ。如来が私どもに恵んでくださっているお心なのだ。これは十方衆生に呼びかけている。十方衆生は、それに気がつかないで動いているけれども、本当は根にはたらいている。だから、教えを聞いてだんだんわかってくる。自分が生きていたのではない、如来のはたらきを聞くと、そのために私は生かされているのだと、眼が変わってくる。そう変わるの自分で変わったのではない。如来の大悲の回向心がはたらいているのだと。そのように親鸞聖人は表現されるわけです。

■宗教的な転換を「往生」と言う

欲生心が成就するというから、終わりかと思いたいのですけれど、本願に終わりはないのです。

兆載永劫の修行に終わりはない。法蔵菩薩は歩み続ける。法蔵菩薩が歩み続けるということは、欲生心が歩み続けるということです。これは、寝ても覚めても私たちがどこかで支え、励まし、聞かしていきようなはたらきが如来の欲生心であるという教えです。ですから、欲生心が成就するということは正定聚の機となることだと親鸞聖人はおっしゃる。われわれは、凡夫でありながら、間違いなく仏に成る位をいただけるのだと。単に凡夫として悲しい人生を生きているのではない。必ず成仏する、あるいは大涅槃を得る、そういう形で仏教が教えたような、苦悩の命を、苦悩を超えて生きような智慧、生死即涅槃というような眼を開く智慧が、信心の智慧としてこの人生においてわれわれに与えられるのだということなのです。

これは、聞いても聞いてもよくわからない所があるのですが、本願に触れるということは、信心をいただくことにおいて生活が変わることなのです。生活が変わるといっても、やっていることが変わるわけではない。ただ、やっていることを感じている主体が、自分が生きている意味が変わる。そうすると、辛いなと思って嫌々生きている命ありがたい。このような形でいただいて生きていけるこの一瞬一瞬ありがたいというように仰げるようになる。闇だなど感じていた人生が明るみを感じながら生きられるようになる。そうすると人生が変わるわけです。そのようなものが宗教的な転換です。それを往生と言う。

現在の相対的状况のなかに新しい眼をもつということは、なかなかわからない。現在進行形的に光に触れつつ生きていけることは、なかなかわからないし、上手く表現できない。それを親鸞聖人は、どれだけ愚かな身であろうとも、どのような境遇であろうとも、光に遇って生きていくことにおいてその意味が転換されるという宗教的生の喜びを、何とか苦勞して明らかにしてくださったのだと思うのです。私としては、そのような宗教的な生命に触れることが、この人生においてあるのだと申し上げたいと思うのです。

(文責：親鸞仏教センター)

親鸞仏教センターの動き

(2016年5月～7月) 一抄出—

■ 2016年

- 5/9 第91回(通算第142回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 5/13 ご命日のつどい
- 5/16 乗満寺公開講座(乗満寺):大澤研究員発表「『親鸞』とは誰か—掴めないその実像—」
- 5/19 第52回現代と親鸞の研究会「尊厳と思いやりが交響する財政一次の世代がその次の世代とつながるために—」慶應義塾大学経済学部教授:井手英策氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 5/22 第13回「仏教と近代」研究会(佛教大学):大澤研究員発表「親鸞像の形成過程—「伝絵」から親鸞へ—」
- 6/4 第24回日本近代仏教史研究会(立正大学):名和研究員発表「清沢満之における「自力/他力」再考—「修養」という語に着目して、長谷川研究員発表「清沢満之の前期思想について」
- 6/9 第92回(通算第143回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 6/10 ご命日のつどい
- 6/12 「宗教」と「社会」学会 第24回学術大会(上越教育大学):大澤研究員発表「親鸞小説のなかの親鸞像」
- 6/13 第53回現代と親鸞の研究会「宗教性を哲学者はどう考えるか」哲学者、早稲田大学人間科学部教授:森岡正博氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 6/20 乗満寺公開講座(乗満寺):大澤研究員発表「『親鸞伝絵』に描かれた親鸞像—宗祖としての親鸞聖人—」
- 6/24 第15回親鸞仏教センター研究交流サロン「現代と古典—「役立つ」学びとは?」筑波大学非常勤講師:川井博義氏、高校生からの哲学雑誌『哲楽』編集人:田中さをり氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 7/3 第23回真宗大谷派教学大会(大谷大学):中村研究員発表「『法然聖人御説法事』から見る「宗」と「血脈次第」の問題」、青柳研究員発表「善導の『大経』観」
- 7/9 東洋大学井上円了研究センター2016年度第2回研究会(東洋大学):長谷川研究員発表「19世紀の宗教思潮からみる井上円了—ヴィクトリア時代の英国と明治日本—」
- 7/22 第93回(通算第144回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- ※6月から新たに「『教行信証』と善導」研究会を青柳研究員が、清沢満之研究会を長谷川研究員が主催し開催。その他、英訳『教行信証』研究会、『西方指南抄』研究会を毎月1回開催。

掲載論文等

- 5月 『近代仏教』第23号
名和研究員「清沢満之研究の道程—没後百周年という交差点」
- 6月 『真宗教学研究』第37号
本多所長「欲生心成就の信」(講演録)
名和研究員「清沢満之における「忘」の意義—『臚扇記』を手がかりとして」
中村研究員「「機法一体」説成立の再検討—一證空における「往生正覚俱時」説を中心として—」
- 7月 長谷川研究員『リクール読本』(共著)